

## 遠隔学校

クルト・ラスヴィッツ 著／志田 慎 訳

「家までは遠い道のりだ—今日のように暑いとそれに気がつく。私は疲れているようだ。だが運動するのは勿論いいことだ」

このようにフリスター教授は、4時間の授業を終えてジムナジウムから帰宅した時に考えた。いまや彼は自分の書斎で寛いでいた。机を前にして座り、両手で頬杖をついてから、早足で歩いたせいでまだ汗で湿っているグレーの頭髪を額からかき上げた。

「まだ小一時間は机の前にいられるが、何をするか。もちろん仕事だ。ここに二つ、青いノートの山がある。最上級生の提出物だ。添削を片付けねば。だが今はできない！むろん毎年新しい世代を、いつも新しい個性たちを、精神の発達のプロセスを導くのはとても興味深いことだ。同じ教材を常に新鮮な力で復活させるのはなんと素晴らしい仕事だろう。これで28回目だ。ただ残念なのは、その個性たちが同じことを少々繰り返し過ぎることだ。これらのノートに書いてあることは、正確にわかる。いつも同じ間違いだ。統計学者にとってきわめて教訓的なのは、すべての個人において同じ人的ミスの特徴が勝利を収めることだ—きわめて興味深い。しかし今は…今はちょっと疲れ過ぎている」

フリスターは日々の気温曲線の推移に関する自分の調査を含む書類の山の一つに手を伸ばし—暑気休みの問題にとって非常に重要だ—読み耽った。まだ乗り越えていない問題がある。もちろん採るべき道はわかっているが、計算には何ヶ月もかかる—どうやって時間を作ればよいか。

彼は羽根ペンをインクに浸してメモをとり、ペンを置いて再び両手で頬杖をついた。

「それならばうまく行くだろう」彼は考えた。「ただ頭が冴えてさえいればよい。だが、いつ？たぐさんのおしゃべり、叱責と、同じ愚かさへの怒

りの4時間と、通勤路。一全体として、学校のテクノロジーは遅れている。もっとましな方法を見つけるべきではないだろうか。教師と生徒たちが一つの教室に集まるという古い慣習よりも…それはむしろ理想的な仕事ではあるが…その一方で多くのエネルギーを浪費し一人を疲れさせる。技術の進歩によって、もっと経済的な方法が見つかるだろう」

フリスターは椅子にもたれかかって少しだけ目を閉じた。

「そうだ」彼はさらに考えた。「100年後か200年後には、この時代の古い、エネルギーを浪費するやり方を、どれほど哀れんで振り返ることだろう！より強い責任感を身につけた若者たち、最新のテクノロジーを使用する教育スタッフ。言い訳も、インチキの試みも、幼稚な悪戯も、失敗も、重すぎる負担もない、理想的な状態だ！どうしてそれまで一ひょっとしたら一休暇を取れないだろうか。これまで一度も思いつかなかったのは不思議だ—非常に不思議だ—いっぺん質問してみなければ…いまノックの音がしなかったか？—ああ、あなたでしたか、同僚のヴォルトハイムさん—来ていただいて嬉しいです！ちょうどあなたのことを考えていました。あなたは発明家だ。ご存知ではないですか？授業を一なんとと言ったらいいか—近代化、簡素化するシステムというか…」

「まあ私が考えますに」ヴォルトハイムの声が答えた。「われわれの遠隔学校は非常に優れたシステムです」

「遠隔学校？なぜ私をそのように一珍しそうに見るのですか、ご同僚。私はちょっと疲れているだけです。どうぞおかけください」

「あなたの授業がもうすぐ始まることは承知していますので、お邪魔にならないといいのですが」

「今日、私の？いいえ、もちろんそんなことはないです。私はとても奇妙な気分なのです、ちょっと頭痛がするようです。きょうはいつたい何日ですか」

「1999年7月9日です、自然教官殿」

「そう、そうです—全くその通り。うーん！私はちょっと思ったのですが—自然教官とは—あなたのご冗談を仰っているにちがいない」

「ともかくそれが第211電話実科ギムナジウムにおける地理の遠隔教師であるあなたの称号です。ですが聞こえませんか。ベルが鳴っています。生徒たちが接続しました。始められます」

フリスターは同僚の顔を見ようとしたが、表情は目の前でほやけた。どこからかわからないが、かすかにメロディックなガラガラ音が聞こえてきた。これはヴォルトハイムの冗談にちがいないと彼は考えた。まあいい、やらせておこう。彼が何を企んでいるかはいずれわかる。そして笑いながら言った。「親愛なるご同僚、私は今のところ何も準備していないし、遠隔学校と仰るのが何のことかもさっぱりわかりません」

「ああ、お願いします、自然教官殿」—再びヴォルトハイムが話すのがはっきりと聞こえた—「からかっておられるのですな。今日の分の講義は既にきのう蓄音機に吹き込んだではありませんか。それから遠隔学校について、あなたは1977年にパンフレットを書いたではありませんか。覚えておいでですよ？」

「私は本当に覚えていないのです」

ヴォルトハイムは笑い声を上げた。「ならば、よくご覧ください」彼は言った。「向こうの壁に独特なギャラリーが見えますね？」

フリスターは見上げた。彼はとてつもなく驚いた。実際に、普段は本棚がある壁には、30個ほどの長方形の額縁があった。だがその中の絵は動いていた。16歳から19歳までの若者たちが楽な姿勢で肘掛け椅子に座っていた。そして本当にそれは彼の受け持つ最上級生たちであった。なじみのない服装をしてはいたが。新聞のうしろからかろうじて坊主頭が見えているのは、彼のクラスの首席の生徒だ。マイヤーは快適そうに葉巻を吸ってさえいた。他の者たちはもぐもぐ朝食を食べている。

「そこに私の生徒たちが見えていると本当に信じたいです」フリスターは言った。「とても興味深い！これが何を意味するのか、わかりさえしたら！ひょっとして私は本当に100年休暇をとったのでしょうか？ご同僚、今日が実際に1999年であるが、私が記憶をなくしていると仮定して、話してください」

「よろしいですとも、自然教官殿、楽しんでいただけるならば。これらの若者はもちろん第211遠隔学習実科ギムナジウムの最終学年の生徒です。彼らは実際に教室にいるわけではなく、大半は自宅にいます。ちょうどあなたご自身と同じように。両親が家の中に遠隔学習装置全体を収容する手段を持っていない場合にのみ、生徒はこの目的のために設置された公共の遠隔学習センターに赴きます。若者たちは、ご存知のように、わが国

のきわめて多様な地域に住んでいます。遠隔学習の通信は千キロメートル以上の距離に対応可能ですから」

「私は本当に全く何もわかりません、ご同僚。どうかお話を続けてください。私の休暇中に技術は偉大な進歩を遂げたにちがいない」

「そういうことです！電話だけではなく、テレビジョンも完璧になったので、話し手の言葉と同時にその人の姿、動き、すべてのゼスチャーを最高度に明瞭に知覚できます。今ではもちろん、遠い通学路を通う必要はもう無くなり、教師も生徒も家にいることができます」

「それはありがたい」フリスターは呟いた。「しかし個人的な刺激は…」

「欠けていません。あなたが生徒を視認するように、彼らにも教師が、特大のフレームの中に、いわば実物大で、目の前に見えます。一方、生徒たちはお互いに姿を見ることはできず、声を聞くことしかできません。しかし彼らが話すことはすべて、あなたに聞こえます。前にあるボタンを押すだけで接続が完了し、授業を開始できます」

「わかりました！どれだけの障害が取り除けられることでしょうか！しかし、そんなに急ぐことがありますかな？どうでしょう、ご同僚、国は施設にかなりのお金を要したに違いありません！」

「たいしたことありません。ニューギニアの無尽蔵の金鉱と、ドイツ領中国の油田が発見されて以来、お金は有り余っているので、結局は教育的よりもましな使い道がないのです」

「なんとまあ！私の月給はいったい今いくらですか」

「ご存知でしょうに！自然教官として—5万マルクです。しかし本題に戻りましょう。もちろん学校衛生学も少なからぬ進歩を遂げています。過重負担の問題は解決されました。生徒が休む安楽椅子には、理に適った方法で自動測定装置が取り付けられており、体重、脈拍、呼気の圧力と量、脳エネルギーの消費量を表示します。脳エネルギーが許容範囲まで使用されるとすぐに、結果として生じた疲労をサイコグラフが認識し、生徒と教師の間の接続は自動的に中断され、該当する生徒は残りの授業を免除されます。クラスの3分の1がこの方式ではじかれたら、授業を終了する必要があります」

「とても良いと思います。しかし、今日のように私自身が少し疲れているとき—」

「ですが給料の範囲です！しかし、それもケアされています。今すぐ始めたい場合は、どうかまずこの刻印された脳保護バンドを着用してください。あなたはこれによって、生徒の能力やあなた自身の給与等級に見合う範囲を超えて脳エネルギーを学校で浪費するリスクから守られます。さてボタンを押してみてください。ベルが鳴るのが聞こえますか。いまあなたの姿が生徒に表示され、あなたは彼らと話すことができます」

「しかし一体何を？私は準備ができていません」フリスターはヴォルトハイムにささやいた。

「それはみつかるでしょう」ヴォルトハイムも小声で答えた。「あなたは経験豊かな教員として、生徒に話させてください。それぞれフレームに名前が出ています。あなたの講義はこの蓄音機にあります。ボタンを押すだけです」

教師がオンラインで入室したこと、すなわち生徒たちに見えるようになったことは、すぐに気づかれた。ラーテンベルクは新聞をしまい、マイヤーは葉巻の燃えさしを脇に置き、ズッパルトとノイマンは朝食のパンの最後の一口を呑み込んだ。

フリスターは映像フレームを見渡した。

生徒の一人が、マイヤーだったが、お辞儀をして言った。「僕は前の時間、欠席しました」

「どうして」

「第2脳回をマッサージしてもらわなければなりませんでした」

フリスターは首を振った。それが現代の基準で十分な釈明であるかどうか、どうして知ることができようか。「それは何のために必要だったのかね」彼は尋ねると、ヴォルトハイムに合図して助力を頼んだ。

「はい」マイヤーは言った。「両親が僕の夢を写真に撮ってもらいましたが、僕がいつも馬の夢を見ていたことがわかりました」

「ごまかしです！」ヴォルトハイムが囁いた。「馬はとっくに絶滅しています」

「しかし馬はずっと前に絶滅しているが」フリスターは言った。

「まさにそのために、先生、私はマッサージしてもらわなければならなかったのです」

「おお、なんと。地理はいちばんの脳マッサージだよ」

フリスターは空っぽだった二つのフレームがちょうどいっぱいになったことに気づいた。彼は名前を読んで言った。「さて、ハインツ、今頃いったいどこから来たのかね」

「すみません、先生、ママがきのうちのポケットプロテインマシーンをスピッツベルゲンのウイメンズクラブに置いてきたので、僕が急いで取りにいかねばなりませんでしたが、風がとても強かったので、遅れてしまいました」

「それからシュヴァルツ、君はなぜこんなに遅く来たのかね」

「僕は、僕は、父がきのう秘密電気評議員になったのです」

「因果関係が見当たらないがね」

「はい、うちはお祝いのために中央スパークリングワイン管理部に接続していたので、すぐに自分の部屋に入ることができませんでした」

「言い逃れです！」ヴォルトハイムが囁いた。「飲んでいたのです」

「まあ」フリスターは言った。「事はあまりはっきりしないようだ。さて、マイヤー、われわれは前の時間に何を取り上げたかね」

「すみません、先生、僕はきのう欠席しました」

「ああ、そうだ。ブランドハウス、言ってくれたまえ」

「すみません、先生、私はきのう勉強できませんでした。これが父からの欠席届です」

ブランドハウスが自分の蓄音器のボタンを押すと、中年男性の低音の声が聞こえた。「私の息子のジーマスは昨日、腕の筋肉の過労のため、学校の勉強ができませんでした。ブランドハウス」

「なんと？」フリスターは問うた。「復習に腕は必要なかろう？」

「うちのモーターの調子が悪かったので、授業の記録に使った蓄音器を自力で回さねばならなかったのですが、ちょうどそれができなかったのです」

「過労は何でなったのかね」

「飛行バイクの練習で」

フリスターは当惑してヴォルトハイムの方に振り向いた。

「あり得ますな」ヴォルトハイムはつぶやいた。「おそらく若い婦人たちと空中パーティーをして、空中カドリユを踊りすぎたのでしょうか」

「やれやれ、ご同僚、遠隔学校では私の時代よりも言い訳が少なくないようです」それから彼は再び生徒たちの方を向いた。

「ではラーテンベルク、われわれは何に取り組んだかね？」

「アメリカとの光電話施設です。しかしそれはもはやありません。化学的遠隔電鍵に置き換えられたため、すべて廃止されました。新たに発見された化学的溶解放射線は地球の高温の内部を通過するため、地球を通して化学的方法で話すことができます」

フリスターは驚いて首を何度も振った。

生徒はこれを不同意のしるしと受け取り、さらに続けた。「先生はもちろんこの接続を『クロイツベルク＝チンボラソ』と呼ばれました。しかしそれも今朝から廃止されました。ベルリン遠隔新聞で読んだばかりです」

「結構。ではホルンボックス、続けて」

「アメリカで最も重要な国はカリフォルニア帝国、ニューヨーク王国、キューバ無政府共和国、メキシコ教会国、南アメリカ太陽国です」

何たることだ！フリスターは思ったが、「シュヴァルツ、続けて」と言うだけにした。

シュヴァルツはフリスターがついていけないほど流暢に話し出した。「太陽放射の作業力への直接利用によって技術者たちが支配的地位につき、人類の資材を手中に収めた後、彼らは熱帯地方の南アメリカの利用可能な土地をすべて購入することによって、株式で国家を設立しました。彼らは太陽から力を直接引き出したので、その国を太陽国と名付けました。高山や樹木のてっぺんや広大な平原の草地に彼らは放射線集積装置を設置しました」

「しかしシュヴァルツ、君は話す時に全く唇を動かしていないね。また、なぜ絶えず机の上で指を動かしているのかね。君はいったい読み上げているのかね？」

「すみませんが、先生」シュヴァルツはさらに自分の席で指を動かした。「私はトーキングマシンを使っているのです。舌を焼いたため、自分では喋れないので」

「それで続けなさい」

「習ったのはそこまでです」

フリスターは困惑してヴォルトハイムに振り向いた。「さてこれからは？」彼は尋ねた。

「蓄音機に語らせてください」

フリスターは装置のボタンを押した。とてつもなく驚いたことに、彼自身の声が聞こえてきた。「これから南極への探検について考察しよう。今日ではむしろ容易に飛行機で氷原の上を滑空できるが、考えてみて欲しい、100年前にはどれほどの困難があったか。貧弱な水上船や、みすぼらしい犬橇で、到達困難な領域に挑むのに、どれほどの勇気が要ったか。もしわれわれの祖先が、君たちと同じように快適にしていたならば、人類は決して南極に到達していなかっただろう。まったく違う人々だったのだ！19世紀の生徒には全く思いつかないだろう、私が残念ながら最近気がついたように、授業中にこっそり人工アスパラガスを食べたり、それどころかほとんど飽食と言っていいほどの美食をすることは。考えてみたまえ、探検家たちが時としてどれほどの飢えの苦しみに耐えねばならなかったか。何週間も、生の鳥の脂肪しかなかったりしたが、彼らは勇気を失わなかった。猛烈な飢えの苦しみの中で一人の英雄が、日記に記憶すべき言葉を書いた—」

「エーミール、今晚は人工アスパラガスを食べたい？高くないわよ」講義のその箇所で話者の言葉の間に突然聞こえたのは、甲高い女性の声だった。

全生徒の大きな笑い声が、この中断を迎えた。

憤慨してフリスターはヴォルトハイムの方を向いた。

「今のは何でしょう」彼は尋ねた。

ヴォルトハイムも微笑していた。「つまりきのう」と彼は言った。「あなたの授業準備中に、ちょうど奥様が入って来られて、質問されたに違いありませんね。それを蓄音機がもちろん正確に再現したのです」

「しかし、親愛なるご同僚、それはこの遠隔学校では少々致命的ではありませんかな」

「ご覧ください、良い面もありますよ。今の爆笑は生徒に負荷をかけたので、8枚の跳ね蓋が閉じました。これらの生徒は疲れすぎたのです。あと3名で、あなたは授業をやめねばなりません」

「おお、それならば私にも都合がいい。すでに言ったと思いますが、私自身が少々疲れていますので。おや聞こえますか、いったい何でしょう、この甲高いベルの音は」

「校長のサインですね。あなたと話したいのです」



実際にフリスターはいまやはっきりと、聞き慣れない声を聞いていた。「すみません、自然教官殿、お邪魔してしまって。たった今報せを受けたのですが、プレヒベルガー先生が飛行バイクで煙突に衝突して、少々ショック状態にあるのです。次の時間、代講していただけますかな？」

「ええ、いいですとも」

校長との通話が途切れた。

「いったい何を始めればいいでしょう、ヴォルトハイムさん」フリスターは訴えた。「残りの生徒はまだ全く元気なようだし、蓄音機はもう使う気がしません」

「昨日の講義内容を再生させてください」

フリスターは再び生徒たちに向かって言った。「私が言ったことを再生してみたまえ」

生徒たち全員がほぼ同時に、講義を記録してある自分の蓄音機のボタンを押すのが見えた。機械の唸り声をした。2ダースの蓄音機から無秩序な共鳴をしながら発せられる講義の言葉が、彼の耳元で唸り声を上げた。それはどんどん速くなり、ぶんぶん唸り、彼は朦朧とさせるような混乱の中で目眩がするのを感じて呻き声を上げ、頭をおさえた。すると突然静かになった—全くの静寂だ。

「ああ、脳バンドだな！」彼は考えた。きっと私は疲労しすぎたので、授業が自動的に終了したのだ—接続が切られたのだな。ありがたいことに。

だが彼は驚いて跳び上がった。前方のフレームは消えていた。元々あった彼の本棚が、再びそこに立っていた。

「しかしこれはいったい何でしょう、ヴォルトハイムさん」

彼の同僚のヴォルトハイムは彼の横に立っていた。「重ね重ねすみません、教授殿。私が起こしたのでなければいいのですが。私が入ってきた時、あなたはよくお休みだったので、邪魔にならないよう私は静かにソファーに座ったのです」

「なんと、私が眠っておりましたか。あなたがいらしたのは聞こえたのですが。奇妙な夢を見ましてね。5万マルクの給料です！しかし最後は同僚の代講を命じられました…」

「ええ、それはあいにく現実です。そのために私は来たのです—トレーター先生が…」

「仰せのことです！いったいいつのことですか？」

「明朝 8 時です」

「教室で？」

「他にいったいどこで？」

「遠隔学校でだと思いました。驚かれましたか。あなたに知っていただけたら！というのは、私は 100 年の休暇をとったのです！さあお掛けください、ご同僚。では明日ですね。それは都合がいいです。今日は本当に、ちょっと疲れておりますので」

(1902 年)

### テキスト

Kurd Laßwitz: Die Fernschule. In: K. L.: Bis zum Nullpunkt des Seins und andere Erzählungen. München 2001, S. 7-16.

同書の解説（149 頁）によると、この作品は 1902 年の短編集「Traumkristalle」に初めて掲載されたが、草稿が作られたのは 1899 年と見られる。これは、作品内の時間軸が 1999 年とその 100 年前であるのにも合致する。